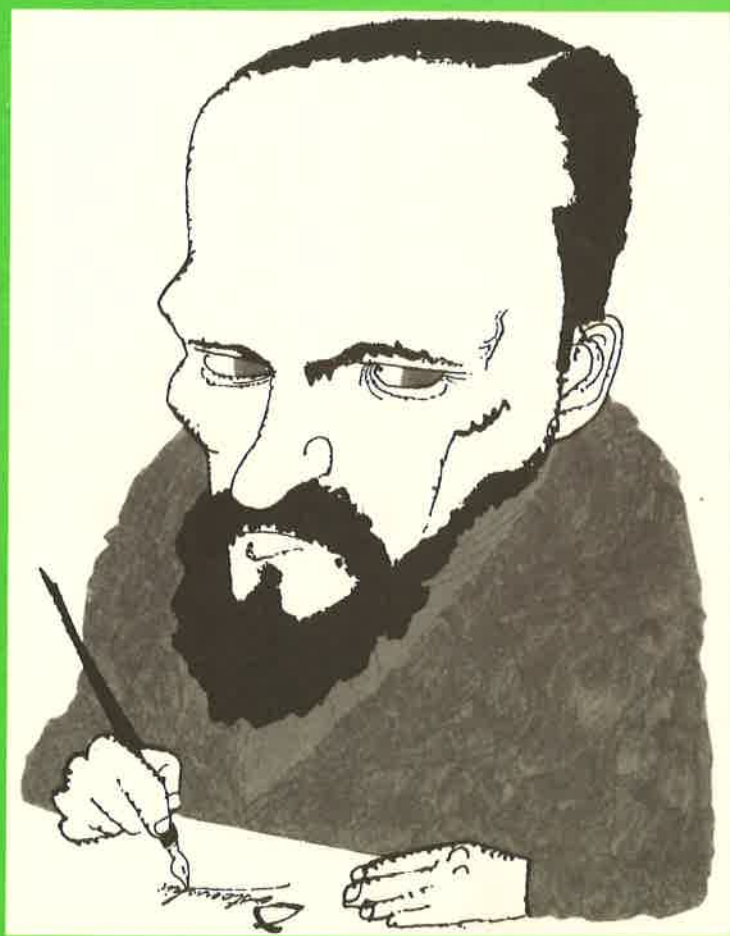


書評

1983. 4

No. 64



書評編集委員会

■新歓企画 ■読書への招待

4 ~ 10

日本社会を知るためのいくつかの書 …………… 山中 敬一 4

江戸時代の朝鮮通信使をめぐる …………… 大庭 脩 5

“国連障害者の十年”にちなんで …………… 山下 栄一 6

日本資本主義発達史にかかわる …………… 安喜 博彦 7
いくつかの文献

遺伝子の分子生物学 …………… 福留 祥子 8

モラトリアム人間論 …………… 佐々木土師二 9

表紙カット・山藤章二「新イラスト紳士録」(文藝春秋刊)より
題 字・網干善教 文学部教授

■ 寄 稿

象徴天皇主義とは何か

——丸山昭雄著『象徴天皇主義とは何か』

藤田 宏三 11

■ 連 載

研究余滴——ボードレール 6

——ボードレールと老婆

山村 嘉己 16

日本中国ことばの来往その13

芝 田 稔 24

羅針盤……2／短評……30／お知らせ……31
編集後記……31／バックナンバー紹介……32

盤 針 羅

今年も「新入生」を迎える四月になった。まさに春、四月、すべてのものが胎動し始め、「新たな」何かに出会う予感のする季節である。だが本当にそれらは、「新たな」何かなのであるか。「新入生」が「新入生」と呼ばれるのは、その存在がフレッシュであるからなのではなく、一九八三年四月に、この関西大学に入学してきたという点においてだけなのである。「新しい」ということは、「既成」のものとの不十分点を克服した存在のことを言うのではないだろうか。その意味では「新入生」は「新入生」ではないと言えるだろう。

政治決戦」を相言葉にした「御老人達」の政治反動攻撃が頂点に達しようとしている。憲法改「正」策動、防衛費がGNP比一％に達しようとする勢いなど、枚挙にいとまがないと言えるだろう。こうした策動は、「既成」のものを固定しようとする動きである。

現在、世界的な経済的危機に見舞われている。大量な失業人口、経営収支の「先進諸国」のマイナスなど、一九三〇年代の世界恐慌以来の構造的危機が訪れているのである。こうした危機を、その矛盾を根底から解決するのではなく、隠蔽するやり方で回避するのが反動なのである。

こうした反動は、社会の中にだけ存在するのではなく、大学がそうした社会の中に存在する以上、この関西大学においてもいくつかの分野で現れている。そうした反動の象徴的なもの

であったのが、昨年十二月に、学生、教職員に対して通告された「自動車等による通学・通勤禁止措置」である。

曰く「事故・迷惑駐車急増」。これが大学当局が今回自動車等による通学・通勤禁止の措置に踏み切った主な理由であった。だがこの「事故・迷惑駐車急増」という理由、一見正当性を持ち合せているようにみえるが、これは理由とは言えない理由なのである。何故なら、この「事故・迷惑駐車」ということは、大学周辺のみならず、一般社会どこにでも存在しているからである。関大の、あの広大な駐車場を閉鎖し、「関西大学通信」等で、「自動車等による通学・通勤を禁止した」と宣伝するならば、実際に「事故・迷惑駐車」は減少するでもないのだろうか。否、むしろ事態は逆であろう。迷惑駐車はさらに増大し、それ故、事故も増

えるのではないか。

このように、今回の「自動車等による通学・通勤禁止措置」は、「事故・迷惑駐車」の問題を根本的に解決するはずもなく、「措置」を行なったことで免罪されてしまった大学当局の欺まんにすぎないのである。だがこの問題は複雑である。というよりも、「事故」だの、「迷惑駐車」だのと、あたかも「人道的」であるかのようにふるまったのはポーズにすぎず、大学当局の真意は「総合図書館・情報処理センター」建設のための、ダンブプカー等の通路、資材置場に駐車場を使用するということであつたのである。

ある事項を決定し、施行していくのに、国家レベルで言えば、「公共の福祉」の裏に隠れているということは、権力の常套手段である。「飛行場を作ること」が「公共の福祉」であり、飛

行場用地や周辺住民の「生きる権利」はその場合「公共の福祉」ではないのである。自動車やバイクに乗らなければ通学できない学生の権利は「公共の福祉」ではなく、誰が決めたか知らないが、「総合図書館・情報処理センター」を建設することが「公共の福祉」なのである。

今や、というよりは、昨今関大における学生の地位、権利などは無風状態である。それにつけ込み、反動の嵐が吹き荒れ、当局が言つてはならない全学自治組織の問題にまで口出ししている。こうした否定的状況をつき崩す、「新しい」力を期待したいところだ。



読書への招待

日本社会を知るための いくつかの書

小説は面白くなければならぬし、学問は楽しくなければならぬ。大学へ入った限り今まで読めなかった本を片っ端から読んでみよう。ただ、五月病などという、今でもあるのかどうか知らないが、ほとんどビョーキになる前に、肩のこらない、また、何か情熱を吹き込んでくれるような本を二、三紹介しておこう。

校内暴力も犯罪も、学歴病もそして諸君の絶望も、何やら「日本社会」というものに関係がありそうな気がする。タテとかヨコとか、甘えとか母系制が大流行で外人さんも総動員で自意識過剰の日本人好みの日本社会と日本人論を開陳している。私もちよつとの間異文化に投げ込まれ、自意識を拡大して色々読んでみた。Arbeitsstaat Japan, rororo が誤解も偏見

も入り乱れ、しかも日本人の自虐心をも刺激して面白かった。邦訳「ドイツ人記者の見た日本」(武田・白石訳、三修社刊)。「南ドイツ新聞」などは、ローヴェオルトの如き由緒ある出版社がかくの如き客観性を欠く著者を出版するのは見識が疑われると手厳しい書評を行っていたが、日本の企業を見習おうなどという経済相に對抗するには、このくらいの方が効果的であらう。もう一つ、こちらは偏見も誤解もない在日の法哲学者の著わした日本社会論、ホセ・ヨンパルト『にんげん研究ニッポン人』新潮社は、特に新入生には日本の学問や学者についてもそのからくりを教えてくれる興味深い著書であらう。法学部生には、法と日本人論という分野の入門書でもありうる。

さて、日本社会を知るには、社会的周縁部分を見るのが一番である。最近、社会史などという学問が流行のようであるが、刑務所の歴史などまさにその代表である。ここでも余り肩のこらないものに

限るが、まず、明治物でその真価を発揮してくれた山田風太郎の『地の果ての獄』（文芸春秋）でも読んで、ファンタジーを交えながら、明治期の北海道の行刑というものに関心を向けて頂こう。が、そこでどまってはならない。大学生ともなれば、なぜ北海道に監獄がつくられたのか、どのような役割を担っていたかを考えなければならぬ。出版は少し古いが小池喜考『鎖塚』（現代史出版会）は、その疑問に答えてくれ、しかも、国家資本主義と近代的自由刑の発達の関係を調べてみようというような気をおこさせるであろう。小島惟謙については図書館前で一度は会うことになるが、津田三蔵がどこでどうして死んだのかを知りたい方は本書でその手掛りを得るだろう。小池の著書にも登場するが、日本の監獄の歴史にも、明日への希望が見られなかったわけではない。受刑者の処遇改善や再社会化あるいは少年感化という社会事業に身を捧げた人々によってその芽がつくられ

た。高瀬善夫『一路日頭二到ル』（岩波新書）は、留岡幸助というそのような人物の代表ともいべき人の事跡を明らかにした好著である。

法学部教員

山中敬一

江戸時代の朝鮮通信使をめぐって

江戸時代の日本は鎖国であり、オランダ船と中国船が長崎へ来航していたことは知っている人が多いと思うが、日本人が海外に住み、日本人が海外へ渡航できたことを知っているだろうか。李氏朝鮮の釜山にあった倭館へ、対馬藩の領民の男子が貿易のために渡航、居住し、常駐者はおよそ五百名に達したというのがそれである。

一七世紀から一九世紀にわたり、李朝の派遣する使節は前後十二回にわたって

徳川政権下の日本を訪問し、朝鮮は江戸時代唯一の外交樹立国であった。そのことは、最近、李進熙、善在彦、李元植、辛基秀などの在日朝鮮人歴史学者と上田正昭、田代和生等の日本人歴史学者の努力によって『江戸時代の朝鮮通信使』（映像文化協会編、毎日新聞社一九七九年刊）、『李朝の通信使』（李進熙著、講談社一九七六年刊）などの著書が刊行され、ようやく一般に知られるようになってきた。

私見によれば、江戸時代史に関する理解は極めて不十分であると思う。長崎に來航する中国船の運航経過を見ると、中国沿岸から東南アジアへ行って年を越しその地の産物を積んで長崎へ北上して行く例が多くあり、日本は鎖国だが、それとは関わりなく、長崎は中国の東海及び南海沿岸貿易の最も北の港であったといえよう。そして、朝鮮通信使と琉球使節とは、重要な外交使節であり、幕府は総力をあげて歓迎し、当時の学者・文人は競って学問的・文学的交流を行った。通

信使の遺墨は李元植氏が『江戸時代の朝鮮通信使』の中に紹介することく多数存する。

そして前記二書で興味をおぼえた諸君は、姜在彦氏が翻訳された申維翰の日本旅行記『海游録』（平凡社東洋文庫 一九七四年刊）を読んで来日朝鮮人の目についた日本を見て欲しいし、一七一九年来日した申氏を迎えた対馬藩儒雨森芳洲についても目をくばって欲しい。芳洲については上田正昭氏の『朝鮮通信使と雨森芳洲』（『江戸時代の朝鮮通信使』所収）によって、朝鮮語の習得につとめ、中国語をも習った、いわば当時無類の国際人であると彼を知って貰いたいし、さらに一步、本学東西学術研究所編の『雨森芳洲全書』三冊にまで研究を進めてほしい。これは滋賀県伊香郡高月町の芳洲文庫その他に眠っていた史料を編纂刊行したものである。

一八七六年、日朝修好条規の不平等条約の強制にはじまる日本の朝鮮侵略の歴

史によって、江戸時代の日朝関係史もまた皇国史観と朝鮮人差別のかげに追いやられてしまった。江戸時代に関する理解は不十分という私見は、ここでも宜なわれるであろう。ただ幸い、江戸時代の史料はなお発掘できる。昨一九八二年三月に新聞に報ぜられた、ソウルの韓国国立中央博物館で発見された日朝関係史の屏風絵や絵巻物もそうだし、私もソウルの国史編纂委員会や、ニューヨークのスペンサー・コレクションで、未紹介の通信使図巻を見ている。埋もれた史料を探しながら研究へ進んで欲しい。

文学部史学科教員
大庭 脩



「この大庭脩先生は、
日朝関係史の専門家として、
この分野に多大の貢献を
なされています。
ぜひとも、
お読みください。
大庭先生、
お元気ですか。」

“国連障害者の十年”に ちなんで

今年は「国連障害者の十年」の第一年目にあたっている。

「障害者」問題については、近年多くの書物が出版されるようになった。だがその大部分は「福祉」という発想からのものであって、「障害者」差別からの解放という視点に立つものはまだまだ少ない。そのような状況を考え、ここでは「障害者」自身による「障害者」解放の立場から書かれたつぎの四冊を推せんしておきたい。

- ・後藤安彦『逆光の中の障害者たち——古代史から現代文学まで——』千書房
- ・楠 敏雄『障害者』解放とは何か——「障害者」として生きる——と解放運動—— 柘植書房

・横田 弘『障害者殺しの思想』JICA

出版

・吉田おさみ『「狂気」からの反撃——精神医療解体運動への視点——』新泉社

「逆光の中の障害者たち」は、古代から現代に至る歴史書、文学書を素材に、著者独自の深い解釈によって各時代の「障害者」像を、生き生きと描き出したものである。ヤスシとルミという二人の「障害者」による対話という形をとっていて大変読みやすいことも本書の魅力である。著者後藤安彦こと二日市安氏は、自身脳性マヒの「障害者」であり、数か国語を習得して翻訳家として生活するから早頃から「障害者」の権利確立のための運動を進めてきた人である。

『障害者』解放とは何か』は、長らく全障連(全国障害者解放運動連絡会議)の全国事務局長をつとめ、現在その副代表として「障害者」解放運動の先頭に立ってきた楠氏が、「視力障害者」としてのみずからの被差別体験を語り、「障害者」解

放運動の根本思想は何かを明確に展開したものである。

「障害児」を親や祖父・母など肉身の者が殺すという事件は今もあとをたたない。しかも「世間」は、殺された「障害児」ではなく、殺した肉身に同情を寄せるのである。そうした「健全者」社会の差別性を、殺される側からきびしく告発しているのが、現在、日本脳性マヒ者協会青い芝の会の会長をしている横田氏の著書である。

「障害者」というとき、多くの人はそれを「身体障害者」とのみ受けとめていて「精神障害者」のことは念頭にないようである。そのことにも示されるように「精神障害者」への差別的偏見は、今もなおきわめて根強く存在している。ことに「精神障害者」の人権の根底的な否定を意味する保安処分制度の導入を軸とした刑法改「正」の策動が強行されようとしている現在、「精神障害者」の側からする「健全者」社会への反撃ともいべき、吉田

氏の著書の提起しているものは、きわめて重たい。一人でも多くの人が本書に注目してほしいと願うものである。

文学部教育学科教員
山下栄一

日本資本主義発達史にかかわるいくつかの文献

経済学はもともと現実の経済の投影である。日本経済・国際経済の現実とその足跡に関心をもつことは、おそらく諸君のこれからの経済学学習の手がかりを与えるであろう。その意味でここでは、日本の経済学と経済の発展にかかわるいくつかの入門書を紹介しておきたい。

まず、玉野井芳郎『日本の経済学』(中公新書)は、「輸入学問」としての経済学の導入とのかかわりで「日本の経済学」の形成史を概観しており、新入生諸君にぜひ一読をすすめたい。外から与えられた

「法則」の日本経済への適用の仕方をもぐつて現段階論、農業理論、幕末・維新論等の広汎な領域でなされた戦前の日本資本主義論争は、日本資本主義の現実の解明をとくに意図しつつも、一般法則への解消論と特殊「型制」論との両極のあいだの激しい論戦に帰着した。最近の日本論も日本の後進性でなく、そのパフォーマンスの良好さに問題意識がおきかえられる傾きがあるとしても、一般性と特殊性への分岐という点では戦前の論争に相通ずるところがある。戦前の論争については、小山弘健編『日本資本主義論争史』（青木文庫、上・下）が論争当事者たちの議論を丹念に再現しており、当時まだ若かった猪俣津南雄、野呂栄太郎、榎田民蔵、服部之総等の熱意とその研究成果をつたえている。なお、この論争の評価については、小野義彦『戦後日本資本主義論』（青木書店）の第一編「日本資本主義分析方法論の再検討」をあわせ読まれることをすすめたい。

事実の集積をつうじて日本経済の百年の歩みを示した揖西光速等『双書・日本における資本主義の発達』（東大新書、全八巻。他に『概説』全一卷、年表あり）は、それらの諸事実が日本資本主義の展開とどのようにかわるのか、ということの究明を意図しており、今日の日本経済の立脚点を知るうえでも有用であろう。また、日本経済の産業基盤の変遷は、有沢広巳監修『日本産業百年史』（日経新書、上・下）によって知りうる。

なお最後に、外からみた日本経済論としてその後の近代経済学の側での日本経済研究の一つの原型をなしたW・W・ロックウッド『日本の経済発展』（中山伊知郎訳、東洋経済新報社、上・下）をも現代日本経済史研究の古典の一つとしてあげておきたい。

経済学部教員

安喜博彦

遺伝子の分子生物学

“生物とは何か”、“生命とは何か”を考える場合、すべての生体を構成する基本的単位である一つの細胞の構造とその機能の理解を必要とし、そしてこの細胞の構造、機能は基本的に遺伝子によるものであるので、遺伝子および遺伝子をとるまく環境についての理解が必要である。遺伝符号、遺伝子の複製、遺伝の発現などの知識と同時に、これらの過程が生化学反応であるので細胞の代謝についての概念を得ることも必要であろう。

生物現象はすべて化学の法則に当てはまる。生物現象を分子レベルで解析することによって生存という状態の基本的な性質を把握することが出来る。これは生物と環境（宇宙を含めての）の関係の理解へと連なる。このような一つの細胞の

構造とその機能を分子レベルで解析するという還元方向への研究の成果を土台として、現在反対方向、すなわち複雑な多細胞生物を形成する各細胞間の膜を通じての相互関係、分化の機構、脳・神経系の組織化と意識の問題などへと研究は伸展しつつある。この研究方向は人間精神の化学的解析の方向でもある。メンデル以降、急速に発展した生命科学を理解するということは、単にこれに関する知識を得るというだけではなく、一生物としての「私」の宇宙を含めての自然界の中での「位置付け」が出来、これはおのずから人間としての在り方にかかわってくる。このような意味において、文・理科系学生にかかわらず現代に生きるものとしてこれらの分野の研究に関心をほらしてもらいたい。

本書の著者は、Francis H. Crickと共に一九五三年、DNAモデルを提唱したJames D. Watsonである。ハーバード大学の生物学専攻学生に対して行われ

た講義を教科書としてまとめたものである。一九六五年出版されたものである。現在では補足、充足すべき点も多いが、初年級学生を対象とした基礎知識を与える本としては充分である。メンデルの法則から初期の遺伝子についての概念、遺伝子と酸素の関係から遺伝子とタンパク質合成の関係を見出すまでの過程、またDNA、タンパク質のX線回路析像の解析から一九五三年のDNAの二重らせん構造の提唱に至るまでの数多くの研究が平易な文章で述べられている。遺伝子作用にかかわる物質代謝、エネルギー代謝について化学的にわかり易く説明された生物現象の化学が容易に理解出来る。また遺伝子の集合体である染色体、遺伝子の構造と機能、遺伝子の複製、遺伝の発現などが細胞内の核酸、タンパク質合成の代謝経路として理解出来るように説明されている。また、特に本書は、著者が実験者として研究の中心的存在であったということからも多くの研究者によって

如何に問題が提起され、如何に解決されてきたか具体的に述べることによって説明を進めており、この点から遺伝子の化学を中心として伸展してきた広い研究分野の研究史でもあり、精神史、科学思想史としても興味深い著作であり、分子生物学の古典的名著といえる。

社会学部教員
福留祥子

モラトリアム人間論

二冊の「モラトリアム人間論」は精神分析理論にもとづく社会的現象の分析書であるが、小此木啓吾著『モラトリアム人間の時代』（中央公論社、一九七八年十月刊）は「現代社会論」であり、同著『モラトリアム人間の心理構造』（中央公論社、一九七九年九月刊）はそのような社会の中で生きる人びとの「人間行動論」とい

うことができよう。ここで展開される「モラトリアム人間」の典型像が大学生であり、また大学それ自体が「モラトリアム精神」の象徴的存在であると考えられるところから、新入生諸君に、大学入学のこの機会に、ぜひ一読をすすめたいと思う。

モラトリアム (Moratorium) とは、「支払猶与」とか「支払延期」という意味の経済用語で、「戦争・暴動・天災・恐慌などの緊急異常時に、金融上の混乱を避けるために、法令で認められた一定期間債務の返済を猶与すること」(角川国語中辞典)と説明されているが、この言葉を転用して、青年期を「心理社会的モラトリアム」の年代と規定したのは米国の精神分析学者E・H・エリクソンであった。つまり、青年期は修業・研修中の身の上であるから、社会(＝オトナ)の側が、その社会的な責任や義務の決済を猶与する年代である、というのである。

ところで、青年期にモラトリアムが与えられるのは、確固たるオトナ社会の存

在が前提になっていた。青年は、オトナとしての社会的自我(アイデンティティ)を確立するまでの一定期間に、さまざまの人間の生き方、思想、価値観を知り、同一化し、判断し、離反するなどの社会的な実験や遊び、時には冒険が許され、そのためにいろいろな人間関係や集団のなかで種々の役割を試験的に身につけるのである。その試みの過程では、自由を謳歌し、社会の風潮から不偏不党であり、自己中心であつてよいが、やがては自己固有の生き方を獲得してオトナ社会の仲間入りをする、という図式が描かれていたのである。

しかし、この図式は現代社会では通用しなくなっている、というのが著者の立場である。今や青年期は単に過渡的段階として位置づけることができなくなり、独自の存在権をもつものになつている。

旧来の意味でならば社会的現実と異質のものであつた「猶与状態」が社会的現実そのものとなり、未熟で未完成な要素を

もつていた「モラトリアム心理」が質的に變つてしまつた。それが青年期だけの特徴でなくなつて一般的な「社会的性格」にならうとしている。かつてのオトナ社会が喪失しつつあるというのである。

「モラトリアム人間」としての現代人の「性格論」や、家庭・学校・企業の中での「行動論」は、新入生諸君が、自分について、他人との関係について、社会との関わりについて考えるために多くの示唆を与えてくれるであらう。

社会学部教員

佐々木土師二

象徴天皇主義とは何か

丸山照雄著 『象徴天皇主義とは何か』(河出書房新書)

藤田 宏 三

著者の丸山照雄氏は日蓮宗の僧侶である。一般的には、「宗教評論家」という肩書きで称されているが、著者自身が最近の評論集である『宗教の内側で』の後書きでも述べているように、日蓮門下の一僧侶として発言しているのだということ念頭に置く必要がある。つまり、著者は日蓮宗という彼自身の根源に立脚して、反「象徴天皇主義」論を展開しているのである。

今日、支配者層によるあらゆる分野にわたる再編が遂行されている中で、宗教界も着実に再編されつつある。その宗教界にあつて、如何に抗し得るのかという問題意識が出発点になつてゐる。そして、そこから状況を切開

せんとしている。その行為が同時に、日蓮教学の追及となつてゐることが丸山氏の立場である。この点は、「宗教性」を否定するところから反天皇論を構築せんとしてゐる田川建三氏と異なるところであり、非常に興味深い問題でもある。

さて、この本は諸々の雑誌等に掲載された評論を集めたものである。そして、出版されたのは一九七六年である。現在の意味があるのは、一九八一年二月のローマ教皇ヨハネス・パウロ二世の来日、六月の世界宗教者倫理会議の開催というように、丸山氏が指摘していた通りになつてゐるからである。このことは、とりも直さず、

問題の所在を適確に把握していたということになる。六〇年代後半以降、現在に至るまで、「象徴天皇主義」運動が如何に展開されてきたのか、支配者層にとって、宗教界の再編は如何なる意味を持つのかということの基本的構造を示しているのがこの評論集である。以下、その内容を検討してみたい。

一、反〈天皇制〉論の方法

天皇「論」の現状は、「擁護」と「批判」との間を明確に区分することは不可能であるとの認識に立ち、天皇主義批判的方法的課題の所在について論じている。まず第一に、国家論からのアプローチによる象徴天皇主義の政治的性格を明らかにすること。第二に、「近代天皇制」形成の社会的・文化的基盤の解明。第三に「近代天皇制」の歴史的基盤の問題の所在を明らかにすること。以上の三点に問題を「整理」している。更に、批判する側の問題として、「天皇制」という政治概念の用い方がある。著者は「天皇制」とは明らかに明治絶対主義権力によって創出された日本近代の特殊政治体制を指定するものと規定している。権力形態については、種々の議論のあることであるが、ここではそれは問題ではない。明らかに

明治以降の政治形態である「天皇制」を、中世や古代にまで拡大解釈して用いることは誤りである。それこそがまさに、「皇国史観」に屈服していることになるだろうし、著者も指摘する通りに「万世一系神話」に乗ぜられているといふほかはないのである。

天皇主義批判の方向に於いて、——社会的基盤と文化的基盤に対する批判が、象徴制の国家論の本質と対応しながら追求されなければ、何のためにいま天皇制批判が必要であるのか明らかとならない——ことをも指摘している。これは、「小天皇制」と称される構造、例えば、家元制だとか家父長だとか、そのような構造を撃つことが、同時に元祖天皇「制」批判であると錯覚している者に対して、それが政治的な意味で具体性を持ち得ないのなら、批判していることにはならないのだと、批判しているのである。そして、天皇主義運動の直接的基盤である宗教へ組織されている者や、無意識に誘導されている人々へ批判の内容が到達しないところに、知識人の弱みがあるとも述べている。天皇主義運動の具体的現実が見えていない知識人の悲劇が、ここにも存在しているのである。

二、象徴制天皇論の現在

六〇年代の天皇タブーから一転して、七〇年代は天皇

論解禁の状態になった。これに先行して、「天皇」は、国内を活発に動き出し、ヨーロッパやアメリカにも出かけていった。天皇論・天皇批判の論は、与えられた「自由」の下で、あろうことか「万世一系」イデオロギーを補完するかの如き様相を呈しているものもある。文化運動として展開されてきた天皇主義運動は、本質を見失った文化論の類いを、自らに吸収してしまっている。著者は、批判を擁護へ導く触媒的作用を成しているものとして、柳田学信仰を挙げている。学問の基本的な倫理性を放棄してしまっている「学者」・「研究者」は、民俗学に心情的にのめりこんでいて、そこから歴史現実を裁断し、挙句の果てに、天皇問題は日本人にとって運命的なのであり、感情問題であるなどと論ずる始末である。かくの如き状態を脱するために、我々は初発の問題意識へ立ち返る必要がある。近代「天皇制」とは何であったのか、天皇主義運動は何を目指しているのか、ということを探り返して問うていかねばならない。著者は次のように述べている——単純明快にそれを確認しておこう。いかに「美的粉飾をほどこし」「文化伝統」を「統合」してみたところで、たかが「国家暴力のイデオロギー・シンボル」でしかないのだ。天皇とは暴力の司祭者の別名である。天皇がいそがしくなったのは、暴力発現の「祭り」に近い

からであろう——。

三、象徴天皇主義批判

「象徴天皇」の性格を把握するためには、「八・一五」で崩壊した天皇制と温存された「天皇」が何であったかを明らかにせねばならない。当然のことであるはずのだが、この基本的なことさえも踏まえられていない反天皇論が、論としてまかり通っている状況が、更なる混乱と立ち遅れを引き起していることを、著者は指摘している。



街中を走り回る右翼

そして、近代天皇制の「政治思想」としての分析は、一応行われているが、大衆運動形成については、ほとんど論じられていないことも、またそうであろう。この点を見落とすなら、天皇主義運動を撃つ視点を失うことになる。

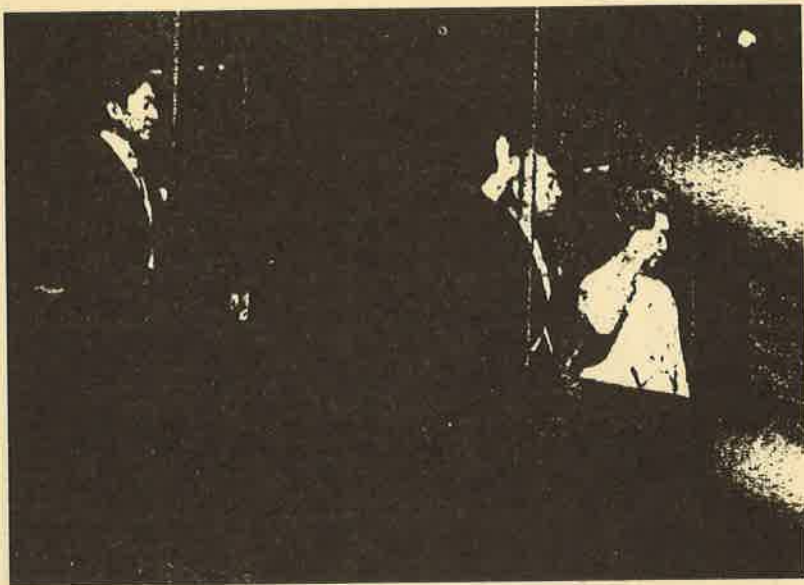
天皇主義運動を、丸山氏は、三つに分類している。第一に、右翼政治集団。天皇の「超越的価値の普遍性」を右翼イデオロギーによって相対化されないために、反共運動を、天皇主義運動の表現である「テロリズム」として行っている。第二に、文化主義路線。(美しい日本と私)というスローガンに象徴される、(美意識を回路とする天皇主義復権)を指摘しているイデオロギー運動である。三島、川端、黛敏郎、東山魁夷らの文化人・「芸術」家をイデオロギーとし、「国鉄」・「電通」を基軸に、組織的に展開され、出所は内閣調査室と憶されている。第三に、国家宗教の再編の基盤となる大衆宗教運動である。天皇主義の「プロバガンダ」としては有効である文化主義路線はそれ自体では、対象の組織化は困難である。天皇主義運動の組織基盤は、政治集団化しないイデオロギー集団である必要がある。「生長の家」「仏所護念会」「靈友会」がその最先頭をなしている教団である。靖国神社法案は、新宗教を中心に反対されているが、そういう教団でも「元号」法制化には賛成している教団もある。賛成・反対は

教団の政治的判断でしかない。この天皇主義運動の基盤としての、宗教教団の組織化の要求が、世界宗教者倫理会議を生み出したということは、丸山氏の言を待たずとも明らかである。

四、戦後天皇制の美意識的再編

ここでのテーマは、美意識の回路が、どのように展開されているのか、ということについての問題提起である。日本の美意識の内実に迫る方法として、丸山氏は、美意識と自然の関係、日本人の土着的宗教意識、日本仏教の精神史から生れた美意識、この三点を検討する必要を述べている。

川端康成は、ノーベル賞受賞講演「美しい日本の私」で鎌倉仏教を王朝文化と結合させるペテンをやつてのけたが、それは、極めて巧妙だった。超越的価値が自然の側にあり、それを対象化しえない美意識が、宗教意識へ還元されることにより、倫理の自律性が成立し、宗教意識は自然観として存在するという、そういう基盤に王朝文化は成り立っていた。鎌倉仏教は、平安仏教への批判から起つたものであり、基盤となる自然観も異なるのだが川端は、自然観という抽象的な言辞で、それらを同一で



皇居での「一般参賀」

あるかのように論じたわけである。そして、王朝文化の連続した流れが、近代詩にまで至っていると述べ「天皇制」も、そうした流れの中で現代に至っていると、本音を露呈している。文化人・宗教家は、このような論理に乗せられてしまったが、その結果は、あらゆる宗教・価値観を超越する象徴Ⅱ天皇を認めるということになるのである。

——つづく

(ふじた こうぞう・学生)

ボードレールと老婆

山村嘉己

1

老婆の絶望

皺だらけの小さな老婆は、そのかわいの子供を見てすっかり気持ちよくなっていた、だれだつてその子にはやさしく、みんなが喜んでもらおうとしていたのだから。小さな老婆の自分と同じように、何とももろいかわいの子供、自分と同じでやっぱり歯もなければ、髪もない。そこでかの女は近づいた、その子に笑みかけ、いい顔をしようとして。

ところが子供はすっかりおびえ、人のいい老婆の手をふり切つて大あばれ、家中に泣き声をひびかすのだつた。そこで老婆はまたまた永遠の孤独に引込み、片隅で泣きながら繰り返すのだ。《ああ、不幸なわたしたち老婆にとつては、人に好かれる時代はすぎた。純真無垢の子供にさえも。わさしたちを見て、子供は恐れる。こんなにも愛そうと思つているのに。》

ボードレールの『小散文詩集』—『巴里の憂鬱』の二番目に出てくる何ともほろろしい、微苦笑を誘う詩ではある。ここではたしかに老婆への軽い憐みの心は感じられる。しかし、一方、その心の片隅に厳しく冷たく見すえる視

線がある。その暖冷両面の混り合いがわれわれにふしぎな心の揺れを呼ぶのであろう。ポードレールが女性に對し一種独特の愛情——いや憎悪といった方がいいかもしれない——を持っていたこと、そしてそれが幼少時の母親の再婚に基く強いマザー・コンプレックス(?)に基くらしいということなどはよく知られている。

女はダンディの逆だ。

だから女は唾棄されるべきだ。

女は腹がへれば食いたがる。

咽喉がかわけば飲みたがる。

さかりがつけばされたがる。

たいしたしろものだ。

女は自然だ、つまり厭うべきものだ。

のみならず女はいつも卑俗だ、つまりダンディの逆なのだ。

『赤裸の心』の一部である。傍点の自然、という言葉に注意しなければならぬ。要するにポードレールにとつては生々しいものはいつも嫌悪を呼び起すのだ。この世に人工の樂園を作り出し、そこに万物照応の微妙な世界を築くことが畢生の夢だったかれには、十九世紀中葉の、



拝金主義の世相はあまりに厳しすぎた。ダンディズムとはその実利主義に對して、ひそかに精神の優越性を誇りうるかれの唯一つの心意気だったのである。

ダンディは何もしない。

ダンディの永久的優越性。

こうした言葉はいくらでも引用することができる。したがって女性がこのダンディの逆であるということは、あまりにも生の欲求に自然に従うものだということであ

ろう。それはつまり性欲を抜きにしては考えられない。それでは性の世界とはボードレールにとつてはいかなるものであったか。

恋愛が拷問または外科手術によく似ていることを、すでにわたしは覚書に書いたと思う。しかしこの考えはきわめて痛烈なやり方で敷衍することができる。たとえ二人の恋人が互いに熱烈に愛し合い、欲情に燃え上っている場合でも、そのどちらか一方は必ず相手に比べて冷静であり、熱中の度合が少いであろう。この方の男か女かが、執刀者もしくは刑吏となる。他の一人は患者となり犠牲者となる。破廉恥な悲劇の序幕であるあの溜息を、あの呻き、あの叫び、あの断末魔の喘ぎを聞くがよい。……かつてローマの詩人オヴィディウスが星の光を移すべく作られたと信じた人間の顔も、見よ今はただ狂ったような残念の表情を示すのみであり、そうでなければ死んだように弛緩している。この種の解体作用を呼ぶのに「法悦境(エクスタシー)」という語を用うるのは正に神の冒瀆であろう。

恋愛はこのように人間の心から自らを制する強い意志を奪いとるものであり、ボードレールにとつて、自然に

なるということは、先ず何よりもこの自己を失うことを意味したのであった。人工を愛したということはその自己を失わないための手段であり、それゆえに愛によつてもまた自己を失わぬことが大切であつた。しかし、自然の愛はまた自己滅却を必然的に要求する。だから自己にとどまりつつ愛を行うことは、自然に逆らう難事業でもあつた。

恋愛は売春の趣味だ。

と断じ、

恋愛の唯一至上の快樂は「悪」をなすという確信にある。

とまで言い切るとき、ボードレールの心には自然に逆らつて人間の尊厳を守るといふ切羽づまつた感情があつたことはまちがいない。

このようなボードレールにとつて老婆とは先ずこの性という残酷な戦いとは無縁の存在だつた。それゆえ、かれは解放された心で老婆の前に座ることができ、自然に憐びんの情も湧こうというものだ。

老婆たちにわたしが感じるあらがいがたい共感の心にはいかなる性的な欲望も含まれていない（『ロマン派芸術』）。

老婆をうたつたいくつかの詩の中に流れるほろ苦い暖かさの秘密はここにあるのだ。

2

老婆をうたつた詩は先にあげたものだけではない。もつと有名なものがある。『悪の華』「パリ情景」の中の一つ、「小さな老婆たち」である。それは《ユゴーに捧ぐ》と傍題された三篇の一つで、いづれもパリの街並をうたつた比較的長い詩が揃っている。それだけではなく、先の「老婆の絶望」とほぼ同じ頃に発表されながら、詩の密度はさわめて濃い。

I

古い都の曲りくねつた壁の中
すべてが、恐怖さえもが魅惑と変るところ
不幸な気性の命ずるままに ぼくは待ちぶせる
老いぼれながらも魅力あるふしぎな存在を。



これらたがの外れた化物もかつてはみんな女だった。エポニーヌ、あるいはライス、砕けたせむしのねじくれた化物。
それでもかの女らを受そうか やつぱりかの女らも魂だから。
穴だらけのスカート 冷たい着物に包まれていても。
非常の北風に鞭打たれ かの女らは這いずり廻る 乗合馬車のきしみ行く騒音に身をふるわせて。
聖なる遺品と見まごうばかり腰にはしつかり

花と絵文字の刺繡入りのバッグをかかえる。

その小走りに歩くさまは さながら繰り人形
傷ついた動物もかくや身をひきずって。

あるいは踊りたいというのでもなく踊ってみせる。

「悪魔」が無慈悲にぶら下る呼鈴のように。

身体は痛み切つてはいても 眼は錐のように人をさし
夜中に水をたたえて光る穴のよう。

あるいはまた光るものに驚き笑う

乙女のような清らかな眼もある。

—— 諸君は気づいたことがあるか、老婆の棺は多く子
供の棺と変らず小さいということ。

この棺の大きさが似ているのは賢しい「死神」の
怪奇で魅力的な趣味が象徴されているからだ。

そして、わたしがごった返すパリの風景の中を
影うすい幽霊が横切つて行くのを目にするたびに
いつもこのかよわい存在はごくゆつくりと
新しい揺籃へ進んで行くと思われてならぬ。

そうでなければ、わたしは幾何学に思いをめぐらし
不恰好な手足を眺めては、いったい何度
職人は棺の形を計り直し、こんな身体の
すべてを収めようとせねばならぬかを考えるばかり。

—— これらの眼はかぎりない涙でできた井戸、
冷え切った金属のこびりついて光る増埒……

これらの神秘的な眼にはさからい切れない魅力がある。
厳しい「不運の女神」に育くまれた人にとっては、

……

III

ああ、この小さい老婆たちの何人のあとをわたしは
つけたことか。

中でも一人の老婆は、沈み行く夕陽が
真紅の傷に空を赤々と染め上げるとき、
人を離れてベンチに座り深い思いにふけていた。

兵隊たちがラッパの音ゆたかに時にわれらの公園をひ
たし

ひとみな蘇生したと感ずる黄金の夕暮どき、
市民の心に何か雄々しい意気を流しこむ

そんな音楽会に耳をすまそうというのか。

この老婆、姿勢なお正しく、誇らかに作法もわきまえ生々した軍楽を貧るように聞いていた

その眼は時に老いた鷲のように見開かれ

大理石のその額は月桂冠を飾るのにふさわしかった。

長いためにⅡの三聯とⅣの六聯とを省略したが、この詩には「老婆の絶望」とは異なる深い沈静の色が見られる。冷ややかに眺めるというよりも、魅せられたようにひき込まれて行く詩人の姿がある。孤独は前者においては身を切るような辛さと感じられているが、ここではかの女性の身を飾る一種の嗜着となっている。この詩とほとんど同じテーマを扱った散文詩「寡婦」の中ではこの孤独の姿をつぎのように描いている。

自分の夢想も分つてくれない子供の手をひく寡婦と
まったくひとりっきりの寡婦と、どっちが悲しく、心
をひく寡婦だろうか。わたしには分らない。一度こんな
ことがあった。長い長い間、わたしはこうした種類の
悩める老婆のあとをつけたのだ。こわばった身体を
まっすぐにしてシヨールをはおり、その全身に禁欲者

の誇りをみなぎらせていた。

ボードレールにとってはこの《禁欲者の誇り》は、かれ自らを他の存在とつよく引き離す大きなポイントであった。ダンディとはもともと他人の預り知らぬ自らの独自性にすべてを賭ける人間の謂であった。孤独に身をよろう老婆は、すでにダンディの逆たる生身の女性を超えた存在となつて、ボードレールのすぐ隣に近づいてくる。すなわち、孤独というものが、あるいは孤独にとどまらねばならぬその運命が、老婆と詩人を近づけ、結び合わせるものである。



「孤独」が詩人ボードレールにとつて独特のテーマであったこともまた周知の事実である。その孤独とは人々の群を離れて、自己の世界に埋没することではけつてない。むしろ群集の中にゆあみする芸術を心得ていることなのだ。散文詩「群集」を見てみよう。

群集 *multitude* と孤独 *solitude* と、勤勉で実り豊かな詩人にとつては等価な、意味の交換しうる言葉である。自らの孤独を賑わしえないものは、騒がしい群集の中にあつて孤独にもなりえない。

詩人は思うがままに自分であり、また他人でもありうるというこの比類ない特権を享受している。肉体を求めてさまようあの魂たちと同じように、かれは望むとき他人の人格の中にまぎれ込む。かれにとつてはすべてが開けつ放しだ。もしどこか閉つていると見えたとすれば、それは訪れる価値がないと見たからにすぎない。

この独特の芸術——または技術——を身につけた詩人は

同類の老婆の中にもかんたんに入り込んで行く。あくまでも一人にとどまりつつ、目にし耳にするすべてのものの中に自由に入出入する。それは群集と結婚するという熱狂的な快楽を享受することだ。《ふと姿を見せた意外な人、側を通り過ぎて行く未知の人に、自らのすべてをあげて捧げることのできるこの魂の聖なる売春》は、《詩》と名づけようと、《慈悲》と名づけようと、《ひとが愛と名づけたもの》よりもはるかに大きな強いものとなり終せる。ボードレールにとつては、現実とはいつてもこのように自他の境目に張られた皮膜の中にあつた。固く窓を閉して自己の中に埋没し切るのでもなく、外に浮かれ出て自らを拡散し切るのでもない。つねに自らの周囲に自由働きかけうる隙間を残すことが、ボードレールの芸術家としての技術であつた。すでに生の現実からは排除されながら、過去の栄光を反芻し、何度も現実界の間へ立ちもどろうとする老人は、それがとくに現実には栄華を誇りえた女性である場合、いっそう強くボードレールの心をそそつたに違いない。もう一つ同じようなテーマを扱った散文詩「窓」を見よう。

外から開かれた窓越しに眺める人には、閉じられた窓を見る人ほどには物が見えない。シャンデリアに照

り映える窓ほど深遠で、神秘で、豊饒で、隠密で、しかも眩惑的なものがまたとあるうか。白日の下で見られるものは、いつも飾り窓の背後で起るものほど興味を引かない。時には暗く時には明るいこの窓の奥では人生が息づき、夢見、苦悩している。

いらかの波の寄せるかなたに、成熟した、すでに皺のよった、貧しい女性がいつも何かにかがみ込んでゐる姿が見える、かの女はけっして外出しようとしなからぬ女の顔、着物、仕草、そしてほとんど取るに足らぬものからも、わたしはこの女性の身の上話を、いやむしろ伝説を作り上げ、時には泣きながら、わたし自身に聞かせたりもする。

もし「その人物」が哀れな老人であつたとしても、わたしはまったくかんとんにかれの話を作り上げてしまつたであらう。

そしてわたしは寝に就く、わたし自身ではなく他人の中に生き、悩んだことに誇りを感じながら。

あなた方は恐らくわたしに言うだろう。《その話が間違ひのないものだと思ひますか?》いや、自分の外に置かれた現実なんて、それがわたしが生きる手助けとなり、わたしが存在し、わたしが何であるかを感じさせてくれたとしてもいっただい何だというのだろう。

すでにふれたように、ボードレールには《わたしの外側に置かれた現実》よりも、そのわたしの内と外に相わたる皮膜の間こそ大切であつた。老婆はその周囲に漂はず孤高の雰囲気の中にその皮膜に似通う何かを偲ばせてかれを誘つてやまなかつたのではないだろうか。

(やまむら よしみ・文学部仏文学科教員)

日本中国

ことばの来往ゆきき その13

芝 田 稔

“同文”のあまさとことば

本学は中国の瀋陽（旧称奉天）にある遼寧大学との間に、友好学術交流についての協定を結んだ。去る三月六日、関大会館において、全学関係者と遼寧大学代表団員立会のもと、大西昭男学長と高仕克校長の調印によって、協定書は正式に発効した。

この機会に協定文作成に当って感得した日本・中国、ことばの来往（この場合は、ことばのやりとり）といった方が適当であるかも知れない）について、その一端を述べておきたい。というのは、“同文同種”という心安さか

ら、文書の作成だけなら、それほど時間もかかるまい、とタカをくくっていたのであるが、さて、その場に臨んで一字一句を吟味していくと、意外にも骨が折れるのである。まずは語彙の問題。同じ意味を表わすにも両国の言語習慣のちがいによって、ことばを使い分けしなければならぬ場合もあれば、案外に日本語彙がそのまま中国のことばとして通用する場合もあった。第二は文法の問題。最も苦手なのは、言語習慣による能動と受動との関係が逆になることである。

では、具体的に述べることにしよう。

本学は遼寧大学といわゆる“姉妹校”の関係を結んだ

のであるが、この「姉妹」に当る中国語は「姊妹ツォーメイ」または「姐妹ジエメイ」である（中国では「姉」という漢字を使用していない）。だから、日本語でいう「姉妹都市」のことを「姊妹都市」ツォーメイ・トウシー」とする例（岩波日中辞典）はあるが、実際には「友好城市」ユーフオ・チョンシー（新日漢辞典）や「友好都市」（日本での新聞用語）を使用しているのである。したがって今回の場合、中国側は「友好学校」としたのに対して本学は「友好大学」ということばを使用した。

なお、序に言えば、日本語の「兄弟国家」と同様、中国でも曾ては「兄弟国家」シユンテイ・クオジヤ」といつていたのであるが、今日ではこれを「友好国家」に改めている。というのは、中国語で「兄弟」といえば、それは日本語の「弟」を意味し、日本語の「兄弟」を中国語では「弟兄」テイシユン」と呼んでいたからであろうか。このまぎらわしさを避けるため、今日では「兄」のことを「哥々」ゴーゴー、「弟」を「弟々」テイテイに統一しているのである。

「友好協力」を中国語では「友好合作」ユーフオ・ホーツォ、また「政治理念」を「政治信仰」チョンジー・シヤン」というのはよく知られているが、図書館規定の中で、相互貸借の場合の「依頼館」とコピーを依頼した

場合の「依頼館」の訳語について、中国側は前者を「借閱館」チエユエクワン（図書を借り出して閲読する側の図書館）に、後者を「索取館」スオチュクワン（コピーを要求した側の図書館）としたのには、漢字の造語力をうまく使い分けたものとして鮮やかであった。

また接続詞の「……または……」の訳語は、通常中国語では「或」フオまたは「或者」フオチョーを用いるのであるが、「定期または不定期」を訳すのに、中国側は「或」を不適当として「和」ホーを用いた。これは私にとつて大へん勉強になった。

「教員及び研究者」は「教師和研究人員」。日本語の「教員」と中国語の「教師」チアオシーには、いずれも教授、助教授（副教授）、講師、助手（助教）が含まれている。当初中国側は「進修生」チンシウシヨウ」という職名を持ち出してきたのであるが、この日本語訳については「研修生」（現代中国語辞典）とするか「留学生」（中日大辞典、外国留学のほか内地留学の場合にも通用する）とするか。またその身分や資格等にもあいまいな点が生じたので、結局中国側は「進修生」を引っこめて、前述どおり教員と研究者に絞ってきたのであった。

「研究雑費」という概念は、中国側では理解しにくいのである。特に雑費ということばにこだわった。結局は「工

作和生活零用費」(仕事つまり研究及び生活上の小遣錢)と訳出してケリをつけたのであった。

もう一つは中国側が無償で提供する「市内交通工具」のことである。この内容理解について紆余曲折があつたが、それは日本でいう「通勤費」に該当することが分つたとすれば「上班交通工具」(岩波日中辞典)とならうが、中国では現在「通勤」ということばを使つてゐるという。そこで「通勤交通工具」トントン・ジアオトン・クンチュに改め、日本語訳を「通勤手段」として落ちついたのである。序でながら別の場所で聞いた話であるが、日本語の「下請」は中国語では「転包」ジユワンパオ」というのだが、最近では「下請」シアチン」が流行語になつてゐるという。

「正文」ということばの理解が一致しない。それぞれ正文とする。『「兩種文本具有同等効力(兩種類の文書はともに同等の効力を有する)」、つまり「正文」ということばの理解にかかつてゐる。なるほど中国語にも「正文」ト「ジョンウエン」ということばがあり「協約の正文」という例文をあげて「協約的正文」(新日漢辞典、岩波日中辞典、現代日中辞典)と訳してある。しかし『現代漢語詞典』は「正文」とは、訳してみると「著作品の本文のこと(注釈、附録と區別して)」と説明してゐるだけであ

る。結局中国側は「正文」では承知できず、前述のように双方の言語習慣にしたがうことになつたのである。

最後にもう一つ。文法上の違いについて一例だけあげておこう。……した場合、原則として受け入れ側が医療費を負担する」という箇所である。この場合中国文では主語をハッキリ立てないと文にならないし、主語と目的語が逆になつて能動と受動が逆になる例である。右の日本文をそのとおりに中国語に置きかえることはできてもそれは中国人の思維にそぐわない。つまり「……した場合、医療費は原則として受け入れ側によつて負担される」としなければ中国的發想にならないのであることが分つた。であるから、中国文は「在……時、医療費原則上由接受方負担」として双方が了解したのであつた。

最初に述べたように、文書の作成については、草案を練つて双方とも同意し、意見の一致を見た上での作業である。だから二、三時間もかければ十分であると思つていたのであるが、午後一時半からぶつ通して八時半までかかつたのであつた。「同文」であつて同文でないこわさが、今回の体験を通して今更の如く身に沁みた次第である。

三十七年振りの邂逅

これより先、昨年十二月二十日から二十四日まで、国

際交流委員長亀井利明教授を団長とする一行五名が、予備折衝のため遼寧大学を訪問したが、私はその末席を汚した一人である。が、私にとって、全く寝耳に水の人選であったので、内示を受けた時は喜びと不安が交錯するのを禁じ得なかった。私は瀋陽に住んだことはないが昭和九年春から十二年秋までの約三年半は撫順で働いたので、少くとも月に一回ぐらいは都会の空気を吸うために、当時の奉天へ行ったものである。

さて、私事にわたって恐縮であるが、私にとって全く思いがけないことが、その遼寧大学で起ったのである。その日は到着第三日目で、午前中は分科会に当てられ



ていた。亀井利明教授と工藤五郎課長は経済学部へ、亀井清教授は理工学部へ。そして鳥井克之教授と私は中文学部の会合に臨んだのである。

その前日の第二日目は双方初の正式会談であり、会談後は学内見学に当てられていたので、大学のアウトラインは一応頭に入っていたのであるが、スタッフについては、わざわざ北京空港まで出迎えられたお二人と校長をはじめ会談中に発言の多かった人だけの、わずか数名しか印象に残っていない。

中文学部を訪れるのは初めてであり、学部長の高撃洲教授とは、前日の会談で顔を合せたばかりなので、初対面も同様であった。いわんや、会合に出席された十数名のスタッフは未知の人ばかりである。

高学部長の出迎えをうけ、案内されて会議室に通された時である。先に着席して待っていた先生方が一斉に起立して拍手で迎えられた。その時、私の前に立ちはだかり、握手を求めてきた年輩者がいる。彼は右手で握手、左手で私の肩を叩きながら大きな声で叫んだ。

「芝田、你認得我嗎——芝田、僕を覚えているかい」
私は虚を突かれた。一体誰なのか。不意のできごとにしばし立往生。

「チュー・メイシュ那、你忘了吧——チュー・メイシュ

だよ。忘れたろうな、」

そういわれると、想い出さざるを得ない。だが「朱」というこの人は……。

やがてみんなが所定の座席につくと、高部長は出席者の紹介を行なった。その時に私がメモしたところによると、彼は『紅樓夢』の研究者として全国的に有名であり、同学会の理事。また明清大学、特に滿族文学に造詣が深く、現在滿族文学史の有力な編集スタッフとして活躍しているのである。

高学部長の学内説明は長々と続く。だが、私の前に座している「朱」という教師をまだ想い出せないのである。何処で会ったのであろうか。時間が経過するにつれて、私はだんだん焦慮の念にかられてきた。そんな時、高学部長の説明にみんながドツと笑い出した。彼も笑っている。その笑顔が私を四十年前の北京へ誘ってくれたのである。そうだ、あの「朱眉叔」だ。と確認できると、彼についての想い出が次から次へと蘇ってきたのである。会合が終り、席を立て別れる際に、私は彼に対して想い出をぶっつけたのであった。

その想い出は可成り鮮明なものであった。昭和二十三年三月発行の『華文国際』八号に『趙蔭棠先生』という短文を書いたことがある。その件は写真のとおりで、こ

れを日本文にすると次のようになる。

ある日、クラスメイトの一人が教室の中で先生に冗談をいった。「先生は標準語音を教えておられるのはありませんか。それなのにどうして河南なまりなのですか。どうも変ですな」……そこで先生はその学生に向って大雷を落された。

このクラスメイトとは、朱眉叔のことである。彼は私の想い出を聞いて「そんなことまで覚えていてくれたのか」と感慨無量の面持ちであった。

私が遼寧大学で、青春の一期期北京で机を並べていた旧友の一人、その彼と卒業後三十七年振りに邂逅できたことは、彼にとつても私にとつても生涯の記念すべきできごとであった。

(しばた　みのもる・文学部中文学科教員)

——雖說是作者是妓女，托于桃花，傷感她自己身世的飄蕩，嘆息青春的喪失，這是一種自嘲詩歌，然而，即或不是妓女，一看楊花南飛又北飛，人莫不怆然感傷悲哀。晚春的柳絮，那就是無數的游魂的象徵。

黃昏，終日飛舞的柳絮，漸々集落于地上，在樹根或人家的牆根，自然做個白雲團。飄浮的一片々柳絮，戀慕地集合于一團濃

挨近臉，也聞得到太陽的香味兒。——天晚了，游明之中，浮動不定的柳絮，比晚秋落葉還覺淒涼。

然而，這也是春夢一場。過了幾天和麗的天氣，柳花也飛盡南北，逛于池塘邊的遊人們早已減却春衣，楊柳榆槐更覺鬱茂，荷葉搖動，蘆荻抽青，於是乎什刹海的風景，送去了三春又開始迎接薰風滿面的初夏了。

(筆者，中國文學研究家)



趙蔭棠先生

芝 田 稔

北風悄悄地在窗外吹着，燈還沒有上，爐火正照對着窗紙上閃爍，而已熱的瓶筆也吱々地發響，這是一個幽靜的冬天的黃昏；在這環境裏，我很喜歡讀書，追思過去。

偶然翻開『桃源』第三號，其中有一篇座談會的記錄『關於中國文化的我見』，在這裏有一段與野新太郎先生的話

「經濟環境豐富的人，或者容易跑到重

慶去，但也有不然，失掉跑到重慶去的機會的人，在戰爭中也很多。他們的苦悶，使我不能不同情。趙蔭棠先生，也是這樣的一個人。」

讀到這裏，我不由得放下了手，口裏叫起「趙先生」來。

那時日本還沒有投降，當然在沒有看到



— 短 評 —

『死刑物語』

カール・B・レーダー 著
西村克彦・保倉和彦 訳

田坂陽一（法学部二回生）

「重い鉄の三角刃は落ちぐあいが悪く、溝縁の中がたついて、ひどいことには、男を切っただけで殺すに至らなかつた。

男は恐ろしい叫び声をたてた。死刑執行人は狼狽して、また庖丁を引きあげて落としましたが、まだ首を切断しなかつた。受刑人は五度ともその打撃の下にわめき声をたて、宥恕を求めながら生きた頭をうち振った。」

憲法第三六条で「残酷な刑罰」は禁止されている。判例は、火あぶり、はりつけ、さらし首などの死刑は「残酷な刑罰」であるが、絞首刑は「残酷な刑罰」ではないというが、はたして残酷でない死刑方法があるというのであろうか。絞首刑でも一般に絞首台で死刑囚が落とされてから、約一〇分後でも心音が聴けるとい

うではないか。

死刑存置論者のかかげる第一の論拠は、「目には目、歯には歯」という応報のおきである。しかし、応報は原始的な復讐欲に身をゆだねることであつて、現代の法律観にはもはや合致しない、と著者は反論する。

第二に、死刑の威嚇作用が強調される。だが、スウエーデン、ノルウェー、オランダその他の諸国では、死刑廃止によつて殺人者の数は影響されていない。この事実からいかなる威嚇力が導き出されるであろうか。それでも死刑の威嚇力を信じている人がいるなら、当然、公開の処刑をも支援すべきであらう。いつそのこと、処刑の実況をテレビで放映したらどうか。そうすれば威嚇作用が最強となる

はずだからだ。

第三に、暴力犯人を処刑すれば社会はいちばん安全であるという主張である。

これはとくに根拠が薄弱である。現在では、きわめて警備の嚴重な拘禁施設をつくつて、犯人の逃走をほとんど不可能にすることは、技術的にみてもはや問題はない。他方において、遺憾ながら、誤判があるのに処刑してしまうと取り返しがつかなくなる以上、処刑でケリをつけることには重大な問題があることが指摘される。

ベッカリアが一七六四年に刑行した著書『犯罪と刑罰』で、この論議に先鞭をつけて以来、賛否両論が展開されているにもかかわらず、死刑の研究をその最古の根源から始めることはあまりなされていない。本書ではまさにその点を探り、死刑の起源を血の復讐と人身御供にあるとし、古代から数々の処刑を辿りながら、七〇に近い図版と様々なエピソードを交え、社会心理学の面から死刑を弾劾する。

お知らせ

編集後記

◎投稿募集

最近読んだ本の書評・内容紹介・批判等の作業を通じて、自己の主張を述べたもの、現状分析、研究成果の発表・論文・エッセイも結構です。

詳細については、生協本部3F「書評」編集委員会までお問い合わせ下さい。

◎投稿規定は以下の通りです。

▼原稿は原則として縦書きで、一行一八字、二二行を(二九六字)を一枚と計算します。ただし連載は、一行二五字、二二行(五五〇字)を一枚と計算します。

▼枚数は自由。(ただし編集上の都合で何回かに分けて掲載することもあります。)

▼締め切りは各月末日。

▼原稿には住所、氏名、学籍番号、電話番号を必ず記入して下さい。

▼原稿は返却しません。必要な場合はコピーをとっておいて下さい。

▼送り先

〒565 吹田市千里山東三二一〇一

関西大学生協同組合「書評」編集委員会

Ⅲ (〇六)三八八一—二二二 内線四八二二

今号は新入生歓迎特集号として、先生方に推せん図書をあげてもらいました。

今まで受験用参考書しか読まなかったであろう新入生の諸君に、大学に入ったらずいずつでも読書する姿勢を養って欲しいという編集部の意図が伝わったでしょうか。今私達の周りには数々のメディアが存在しています。しかし、ゆつくりと時間をかけることができ、繰り返し対話のできるメディアは、今でも文字だと言えるでしょう。これから四年間少しでも良いから、この忙しい現代において物事をじっくり見るために、読書をする姿勢を持つて欲しいと思います。

「象徴天皇主義とは何か」は、現代天皇制の一面を鋭く捉えた書評です。「天皇制」とは「国家暴力のイデオロギー・シンボル」であり、「天皇とは暴力の司祭者の別名である。」という、丸山照雄の言葉を通しての論者の展開は、私達を大きくうなずかせる捉え方だと思えます。一九七〇年代後半以降、天皇のアメリカ訪問などにみられる動きの活発化、元号法制化、日の丸・君が代教育、靖国神社法案制定化策動など、天皇制を持ち出す政治的動きが活発化してきましたが、まさに論者の言う「暴力発現の「祭り」に近い」ということだと思えます。今後も私達編集部は、現在のな天皇制の意味について把えていく作業を続けていきたいと考えます。

次号書評六五号は、六月に発行の予定です。内容は、昨年十一月に行なった連続シンポジウムの記録の一部を掲載します。

書評・バックナンバー

掲載論文一覽

第62号 '82・9

■特集 第三世界にとっての経済学とは

フランス派「不平等交換論」木田 和雄
 マーケティング的視点からの多国籍企業 市川 浩平
 南北問題の根底にあるもの「資本論」の現代的活性化を通じて 若森 章孝
 現代マルクス主義への招待 石木 真透
 日米貿易摩擦と農業問題 東井 正美
 日本中国言葉の来往(11) 芝田 稔
 北京で生活して(10) 鳥井 克之
 研究余滴ボードレール(4) 山村 嘉己

■連載

憲法改正「正」刑法改「正」問題 堀 賢士
 憲法改正問題を考える 大山 弘
 監獄法改正を考える 森井 暉
 反動立法の方向性を見究めよう 竹内 良知
 教科書問題について 芝田 稔
 日本中国言葉の来往(12) 鳥井 克之
 北京で生活して(終) 山村 嘉己

第63号 '82・12

■特集

実践主義者としての新聞記者をめざして
 現代社会の構造的(へびずみ)の告発 田宮 武
 情報環境を見直す目をテレビの技術開発を支配したもの 渡辺 幸博
 ジャーナリズムとテレビ 足立 利雄
 ジャーナリズムとテレビ 橋本 敬造
 ・メディア 井上 宏
 マスコミと国民の知る権利 薄田 桂
 象徴交換論への招待 中村 主永
 『映画の弁証』から 石木 真透
 写真は何処へ 黒岩 岳男
 魯迅の文字改革論 伊井健一郎
 日本中国言葉の来往(10) 芝田 稔
 北京で生活して(9) 鳥井 克之

■翻訳

■連載

第60号 '82・4

■特集

読書への招待 小代誠一郎
 論争・ポルノと「性非行」 福田 昌敬
 レクチュールの立体学 福田 昌敬
 差別落書問題をめぐって 田宮 武
 ・まとめ 田宮 武

日本中国 言葉の来往(9) 芝田 稔
 北京で生活して(8) 鳥井 克之
 研究余滴ボードレール(4) 山村 嘉己
 在日朝鮮人文学覚え書(2) 吉田 永宏

第61号 '82・6

■特集

現代マスコミ・メディア
 ・映像問題を問う

君も新入生歓迎行事に 組織部の参加しよう!

第1回セミナー

とき 4月28日(日) 29日(金)

ところ 奈良

テーマ 大学ってどんなところ?
■パート I ■

参加する先生方

文学部仏文科教員 山村 嘉巳
◇ 独文科教員 小川 悟
◇ 哲学科教員 渡辺 幸博

第2回セミナー

とき 5月7日(日) 8日(月)

ところ 京都

テーマ 大学ってどんなところ?
■パート II ■

参加する先生方

社会学部教員 木村 洋二
◇ 教員 小原 仁
商学部教員 鍛治 邦雄

新入生歓迎講演会

テーマ ■ 今、これから君たちは……?

講師 ■ 未定

場所 ■ 法文Dルーム(予定)

日時 ■ 4月20日・PM1時(予定)



1983年4月号 通巻64号

編集・発行 関西大学生生活協同組合・組織部「書評」編集委員会

連絡先 吹田市千里山東3-10-1 (☎ 388-1121(内線 4821) or 384-9874)

頒 価 250 円